
東方華妖戦

鬼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方華妖戦

【Zコード】

Z2648BA

【作者名】

鬼人

【あらすじ】

現代の裏側にひつそりと存在する幻想郷、ある夏の日の満月の夜、八雲紫は不気味な気配にいち早く気付き、魔法の森を訪れた…

プロローグ 気配

獣さえも恐ろしさに身を潜める妖怪達の時間、森、山、湖、幻想郷の全ては淡い月の光で照らされていた。今宵は満月。闇の力が最も強くなる時である。

妖怪の賢者、八雲紫は魔法の森の中を歩きながら、辺りを見回した。木々が生い茂るこの森では、地上まで月の光が届かない。だが紫は空に浮かんでいる、夜の象徴の存在をひしひしと感じていた。

紫「こんな月の綺麗な晩にこんなことが起こるなんて、本当に面倒だわ」

その風貌に似あわぬ鋭い目つきで再度、紫は辺りを見回した。やはり氣のせいではない。侵入者がいる。それもただの侵入者ではない。この気配は…

紫「まあ、いいわ。向こうがそのつもりならこっちだって喜んで相手になるわ」

紫はそう呟くと、闇の中に消えていった。

第一話 暑い夏の神社にて

魔理沙「靈夢うー、暑いぜー」

そつ言いながら、白黒の少女が空から降りてきた。それを見て、境内の掃除をしてるフリをしていた靈夢はため息をついた。

靈夢「毎回毎回思つんだけど、夏なんて何処にいても同じでしょ？なんで毎日神社に来るのよ」

魔理沙「暑いから暇をつぶしに来たんだぜ。取りあえず麦茶でもくれよ」

靈夢「裏に井戸があるわよ」

靈夢は持つていた箒で神社の裏の方を指した。

魔理沙「井戸の水なんか温くて不味いだろ？いいから麦茶出せよ」

靈夢「確かにそうだけど、麦茶だつて冷たくないわよ。こんな暑い中で冷たい飲み物なんか有るわけないでしょ」

魔理沙「嘘つくな。紫に冷蔵庫とかいうの貰つたんだろ？香霖が言うには、冷蔵庫は一年中食べ物とか飲み物を冷やしておけるって聞いたぜ」

靈夢は顔をしかめた。

靈夢「なんで冷蔵庫貰つたこと知つてるのよ？」

魔理沙「紫本人がこの前の宴会でべらべら喋つてたぜ。気づかなかつたのか？」

靈夢「なんで紫は呼んでないのに何時もいるのかしら…仕方ないわね」

靈夢は渋々、神社の裏の方に回つていった。魔理沙は「イヒヒ」と笑いながら、その後を追つた。

萃香「お～い靈夢っ、つまみ無いの？つまみ」

神社の裏の縁側では、伊吹萃香が一人で座つて酒を呑んでいた。

靈夢「あんた…何時からいたの？」

萃香「魔理沙が来るちょっと前にはいたねえ。それより酒のつまみ無いの？」

靈夢は簾を投げ捨てる、建物の中に消えた。

魔理沙「あれはかなりイライラしてるぜ。イヒヒ」

萃香「まあ、仕方ないさ。いきなり自分の家に来て団々しく食べ物要求する奴が一人もいるんだから」

魔理沙「あいつをあんまり怒らせない方がいいぜ。上から陰陽玉が降つてくるからな」

萃香「魔理沙もね」

二人は顔を見合させて、性根の悪い笑みを浮かべた。

靈夢「ほら、持ってきてあげたわよ」

靈夢が戻ってきた。不機嫌そうな顔で戻ってきた。

萃香「スルメイカか、しけてるねえ」

靈夢「ほら、キンキンに冷えた麦茶よ」

魔理沙「ああ、『苦勞さん』」

三人は並んで縁側に座つた。靈夢は熱いお茶を持つていた。

魔理沙「こんな時によくそんな物飲めるな」

靈夢「熱いお茶が一番よ。それにしても今年は夏が長いわねえ」

萃香「確かにそうだね。もう九月の終わりだってのに、まだまだ暑さが引く気配がないね」

靈夢がピクッと動いたのが他の一人にはわかつた。

魔理沙「多分、異変じやないぜ。確かに暑さが続いてるけど、一年なんて十月の中旬まで猛暑が続いたじやないか。その時も何にもなかつたんだろ?」

靈夢「そういうえばそうだったわ。最近、大きな異変が起きないわねえ」

魔理沙「そういうえばそうだな。最後に起しつたでかい異変ってなんだっけ？」

靈夢「でかい異変って言われても、程度がわからぬいじゃないの。異変なんてほほ毎日起しつてるようなもんなんだから」

魔理沙「…返す言葉がないぜ。なんか面白ことども起きないかなあ」

靈夢「魔理沙の言つ面白い」とは起しつてほしくないわね。私は面倒だから神社から動きたくないわ」

魔理沙「あつ」

魔理沙が何かを思ひ出しつゝ立ち上がつた。

靈夢「どうしたの？」

魔理沙「今日はアリスの家に行くんだつた。忘れてたぜ」

靈夢「アリスの家つて…何しに行くの？」

魔理沙「珍しいキノコが採れたらしいから、貰いに（パクリに）行くんだ」

そう言つと、魔理沙は飛び去つて行つた。靈夢はため息をつくと立ち上がつた。

靈夢「本当にキノコ好きねえ。さて、私も掃除しなきゃ。萃香はそ

「」で大人しくしてよ？」

萃香「はーい」

萃香が笑いながら頷くのを見て、靈夢は境内の方に消えていった。
そして、縁側には萃香一人になつた。

萃香「どうやら氣づいてないみたいだよ」

紫「どうやら、さうみたいね」

空間がパックリと割れ、萃香の後ろから紫が出てきた。

萃香「靈夢にしては珍しい、まさか異変の気配に気づかないなんて」

紫「仕方ないわよ。今回のはただの異変じゃないんだから」

萃香「まあ、確かにそうだねえ。こんな些細な気配に気づけるのは
妖怪ぐらいだしね。それに今回は、異変と言つていいかわからない
しね」

紫「そうねえ。こんなこと、あの吸血鬼以来ね」

萃香「いやー、あの吸血鬼よりよっぽど性質悪いと思つたぞ」

紫「取りあえず、今は警戒するしかないわ。萃香もしつかり見張つ
てて頂戴よ?」

萃香「わかってるわかってる、任せろって」

紫は「フフフッ」と笑うと、スキマの中に消えていった。

第一話 赤い眼の少女

太陽が真上に上り始めたころ、藤原妹紅は竹林の中を歩いていた。何かしようとしたわけではなく、ふと思いついて散歩していたのだと言いたいところだが……

妹紅「一体どこの辺につだ？」

妹紅は辺りに注意を配りながら呟いた。朝起きた時からだ、家の周り：いや、竹林全体に不気味な妖気が漂っていたのは。その妖気の正体を探して、妹紅はずつと竹林の中を歩き回っているのだ。気になるとかそういう類の物ではない。

なにか…自分の中の本能というやつだろうか、それがこの竹林にとんでもない奴がいると告げている。千年以上妖怪の相手をしてきたが、こんな感覚は初めてだ。

妹紅「こいつが私を殺してくれるかもと思つてゐるのか？」

自分自身に問いかけて、妹紅はフツと笑つた。今更死ねないことぐらいわかっている。だが、やはりこの長い苦しみから解放されたいとは思う。そう思つて、ずっと危険を冒してきたのだから。

妹紅「む？」

小さな少女が妹紅の方に背を向けて立つていた。この辺りは妖怪が多く出る、竹林の奥地だ。何をしているのだろうか？

妹紅「おい、お前こんなところで何してるんだ？」

妹紅は少女に呼びかけながら、走り寄った。少女は振り向いて、ま
つすぐに妹紅の方を見た。

バンシー「私バンシーっていつの、あなたの名前は？」

燃えるような真っ赤な目を見た妹紅は、その場から動けなくなつた。

バンジー「ねえ、お名前は？あなたの名前、教えてよ。」

こいつだ、間違いない！不気味な妖気の正体はこの少女だ！！

奴紹
お前、奴怪か(?)

ハンジーー私はハンジーーあなたは?」

妹紅はバンシーの動きに苛々戒しながら答えた。

妹紅
—私は妹紅だ

ハンジーーもじゅうていうの? 変わった名前ね。 あなたの...「

バンシーは突然、目をカツと見開いて後退させた。

妹紅「おい、どうし……」

バンシーは頭を抱え込むと、その場にしゃがみ込んで絶叫した。妹紅は驚いてサツと身構えた。

バンシーはガバッと立ち上がると、妹紅の方を見た。目を限界まで見開いているが、真っ赤なので見えているのかわからない。醜くゆがんだ顔で血の涙を流している。

バンシーは妹紅に襲い掛かってきた。まったく訳が分からぬが、長年の戦いで鍛えられた本能が妹紅の意思より早く動いた。

妹紅「はあつ！」

バンシー「がはつ！」

妹紅「なんなんだよ、まつたく」

悪態をつきながら、妹紅はバンシーから距離を取つた。二つの近くにいると、何故かはわからないが身の毛がよだつ。

バンシー「がああ…ああ、がああああ」

妹紅を睨むバンシーは既に真面な言葉を発していなかつた。なんだよ、本当に！

妹紅「私が何かしたのか？」

問い合わせてはみたが、思った通り返事は返つてこなかつた。

バンシー「がああああああああああああああああ！」

妹紅の蹴りのダメージは無いのか、また飛び掛かつてきた。

妹紅「えい、もうどうにでもなれ！」

妹紅はバンシーのガラ空きの胴に向かつて、また蹴りを入れた。手応えはあつた、だが返り討ちにされる前にバンシーは残像となつてスゥーッと消えてしまつた。

妹紅「何！？」

バンシー「がああああ！」

突如、背後から現れたバンシーは妹紅の背中に抱きついた。

バンシー「がああああ、がはつ！」

妹紅「うつとおしい！」

妹紅の体から発せられた炎は巨大な翼を作り、一気に一人を呑み込んだ。

バンシー「があああああああーああああああああー」

妹紅は無傷だが、バンシーはただでは済まない。高温の炎に焼かれ、地面を転げまわっている。全身に火傷を負っているのだが、その傷はみるみるうちに回復していく。やはり妖怪なのだろうか？

妹紅「少しばかり私の話を聞け。私が何かしたのか?」

流石に静かになつただろ。それにしても、今の動きはなんだつたんだ？手応えは確かにあつた。それなのにこいつは後ろから現れた。

バンシー「がああつ！」

バンシーは飛び起きたと妹紅の方を見た。じいつけはせつときから真面な言葉を喋らないうえに、ずっと目が赤いままだ。最初は普通に喋つてたのに一体なにが…

妹紅は鼓膜が破れるかと思うほどの大絶叫に、思わず耳を塞いだ。

妹紅「くそ……なんだよ、こいつ……」

そう呟いた瞬間、バンシーの叫び声が突然途切れた。また襲い掛かってくるのかと思い、すぐに身構えたがもうそこには赤い眼の少女の姿はなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2648ba/>

東方華妖戦

2012年1月14日16時48分発行